



Title	北米先住民研究における「歴史的トラウマ」論の展開
Author(s)	近藤, 祉秋
Citation	アイヌ・先住民研究, 1, 53-66
Issue Date	2021-03-01
DOI	10.14943/97155
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/80887
Type	bulletin (article)
File Information	04_Development.pdf



[Instructions for use](#)

北米先住民研究における 「歴史的トラウマ」論の展開

近藤 祉 秋
(神戸大学)

要 旨

本稿では、北米先住民の「歴史的トラウマ」に関する先行研究を検討し、この分野で今後必要と考えられる視点を得ることを目的とする。「歴史的トラウマ」は、これまで先住民が現代文明に適応できない証として考えられがちであった健康格差が入植者の非人道的なふるまいによってもたらされたものであることを指摘した点において大きな意味をもつ。だが、近年では「歴史的トラウマ」論に対する批判もある。第1に、「歴史的トラウマ」に関する研究の多くが「歴史的トラウマ」を受けた集団はすべて何らかの機能不全に陥ることを前提として進められている。第2に、「歴史的トラウマ」の議論は現在の状況を説明する際に過去の事象に着目する一方で、現在でも引き続き人々が直面している抑圧の構造は等閑視されがちである。「歴史的トラウマ」概念のアイヌ研究への応用を考える際には上述した批判も念頭に置きながら進めていく必要がある。

キーワード：先住民ソーシャルワーク、語り、医療化、北方アサバスカン

1 はじめに

本稿では、北米先住民の「歴史的トラウマ」に関する先行研究を検討し、近年の研究で得られた知見も含めて、この分野で今後必要と考えられる視点を得ることを目的としている。「歴史的トラウマ」は北米先住民のソーシャルワーカーによって先住民研究における有用性が説かれ、北米における関連するさまざまな取り組みや政治的な運動の足掛かりとなってきた。また、この概念は世界各地の先住民学研究者の間でも受容・議論されており (cf. Wirihana and Smith 2014)、本特集の序論で北原が論じるように、今後のアイヌ施策やアイヌ民族教育においても検討するに値する視点を含んでいる (北原 本特集)。ただ、1990年代から2000年代前半に登場した「歴史的トラウマ」の先住民学的研究は、近年では精緻化が進むとともに、先住民社会が主流社会から被ってきた抑圧とそこから生じたとされる健康格差を論じる上で不十分な部分もあることが指摘されるようになってきた。近年なされてきた精緻化の動向と批判的な見解も踏まえて北米先住民の「歴史的トラウマ」に関する議論を紹介しながら、その有用性と留意点について明らかにし、アイヌ施策やアイヌ民族教育に

関する提言を考える際の参考となる情報を提供することが本稿のねらいである。

まずは「歴史的トラウマ」の先住民学的研究の嚆矢となったブレイヴハートらの研究を検討し、次に初期の研究を発展させる形で提起された「歴史的トラウマ」の「語り」に着目するアプローチを紹介する。続いて、「歴史的トラウマ」概念に対する批判的検討をおこなったキルマイヤーらの議論を検討する。これらの先行研究の展開を追いかけた後、「歴史的トラウマ」論を先住民の生活世界を理解する時に援用する際に留意すべき点について、北方アサバスカン民族誌の文脈に引き寄せながら論じる。本稿は、おもに理論的研究を目指すものであるが、私がおこなってきた内陸アラスカの北方アサバスカンの人々の間での調査から得られた知見にも部分的に言及することとする。

2 北米先住民の「歴史的トラウマ」

「歴史的トラウマ」概念を先住民研究の文脈に導入したことで知られるマリア・Y・H・ブレイヴハートによれば、「歴史的トラウマ」(historical trauma)は、「大規模な破滅的事件に起因し、[個人の]生涯および世代間にわたって蓄積されるトラウマ」と定義される(Brave Heart 1999: 111)。また、関連する概念である「歴史的トラウマ反応」(historical trauma response)は、鬱症状、自己破壊的行動、薬物乱用、祖先の痛みへの同一化、トラウマへの病的執着、身体症状、不安、罪悪感、慢性的な喪失感を含み、他のトラウマサバイバーがトラウマ反応として示すものと類似の症状であるとされる(Brave Heart 1999: 111)。

ブレイヴハートとレミラ・M・デュブリンの論考(Brave Heart and DeBruyn 1998)は、「歴史的トラウマ」を先住民研究の文脈に位置づけた初期の研究であるが、彼女らのアプローチはナチスドイツによってユダヤ人が虐殺されたホロコーストと(ブレイヴハートの出身集団である)ラコタの人々が経験したウンデッドニーの虐殺¹を「トラウマ」として同一視する視点に立つものであり、ホロコーストのサバイバーとその子孫に生じたとされるトラウマ反応は、ウンデッドニーの虐殺やその他の主流社会からの抑圧を経験してきたラコタの人々にもみられると主張した。ラコタを含む北米先住民の人々は、疫病や虐殺による大量死、寄宿舎学校における差別や虐待、同化政策、都市への移住促進政策によって親族の紐帯や文化的知識を剥奪されたことで「未解消のままの歴史的な悲痛」(historical unresolved grief)を経験し、それが蓄積されることでホロコーストのサバイバーとその子孫に似た症状を引き起こしているという説明がなされた(Brave Heart and DeBruyn 1999: 66)。

ブレイヴハートらによれば、北米先住民社会で問題とされているアルコール中毒は、北米先住民のアルコール代謝の低さや酪酐による宗教的体験の追求という論点で説明できるものではなく、世

1 ウンデッドニーの虐殺は、1890年12月に米国サウスダコタ州のウンデッドニーで合衆国軍の第7騎兵連隊によって現地先住民に対しておこなわれた虐殺のこと。非戦闘員を含む300名近くの死者を出した(小野1979: 96)。

代間に伝達される未解消のトラウマと悲痛が原因であるという。虐待や差別を原因とする悲痛にさらされ続けることで、未解消の怒りや心的抑圧が生まれるが、それらを主流社会に向かって直接的に表明することは危険をとまなうため、自己に向かうようになり（フロイドの「攻撃者との同一化」）、自己嫌悪が内面化される。北米先住民のアルコール中毒者は、このように内面化された自己嫌悪が原因となって、自己破壊的な行為としてのアルコールの過剰摂取におよぶとされる（Brave Heart and DeBruyn 1999: 69-70）。

「歴史的トラウマ」や「未解消のままの歴史的な悲痛」は、トラウマが世代間に伝達されることを特徴としている。この点については、児童虐待の連鎖を事例として説明された。例えば、ブレイヴハートらがおこなった集団セッションの参加者は、以下のように述べて、虐待を受けた寄宿舎学校のサバイバーたちが親になり、今度は自分の子に対して虐待をする側に回ったことを示している。

私たち全員はいまだに激しい怒りを感じている。…このあたりで [ウンデッドニーの虐殺を引き起こした] 騎兵隊が駆け回っているわけではない！ 私たちが自分たちに対してやっているんだ。私は寄宿舎学校に行ったことはない。私は寄宿舎学校に行きたかった [とさえ思ってしまう]。なぜなら、私たちが話してきた虐待のすべてが私の家で起こったことだからだ。もしこれが見知らぬ人によって引き起こされたのであれば、性的虐待やネグレクトもここまで悪いことではなかった。もしそうならば、別の人種のせいにするのができたから。…（沈黙）…私の家では親に心を開いたことなんかなかった。物理的には彼らは家にいたけど、でもただそれだけだった。そう、彼らが寄宿舎学校に行っていたんだ。（Brave Heart and DeBruyn 1998: 73）

ブレイヴハートらの理路に従えば、寄宿舎学校のサバイバーが今度は自分の子どもに対して虐待を加える加害者となってしまうのは、サバイバーたちが通常であれば家族や親族との交流を通じて自然に学んでいくはずの育児に関する文化的知識や実践を学ぶ機会を奪われ、さらには未解消のままのトラウマや悲痛を抱える中で「攻撃者との同一化」を経て、自分の子どもに対して内面化した自己嫌悪を向けてしまっているからだとされる。それでは、この負の連鎖を断ち切るためにはどのような方策が有効なのだろうか。

ブレイヴハートは、ラコタ出身のソーシャルワーカーとして、ラコタの世界観に基づいた臨床実践に携わってきた。彼女が他の実践者と共同で作ったワカンヘジャ・プログラムは、薬物乱用防止センターの資金援助を受け、ラコタの人々が直面してきた「歴史的トラウマ反応」を癒すことを目的としている。「ワカンヘジャ」はラコタ語で「子ども」（大地に戻ってきた精霊）を意味する。このプログラムでは、とりわけ青少年によるアルコールの過剰摂取や薬物乱用の防止を取り組みのねらいとしており、ラコタの伝統に基づいた育児方法の学習が重要視されている。彼女によれば、若者のアルコールの過剰摂取や薬物乱用はスピリチュアルな基盤が安定していないこと、先住民とし

でのアイデンティティが弱いこと、家族との絆が弱いことに起因しており、逆にみずからの文化を重要視したり、家族の紐帯が強かったりする家族の子弟は、アルコールの過剰摂取や薬物乱用に陥りにくい。このプログラムは、寄宿舎学校がもたらしたトラウマが虐待や自己破壊的な行為の世代を超えた連鎖という形で繰り返されているという見立てを踏まえて、問題の解決のためにはその連鎖を断ち切るような育児方法を親が身につける必要があるという考え方に基づくものである (Brave Heart 1999: 115-116)。

ブレイヴハートが報告するプログラムの実施要領によれば、ワカンヘジャ・プログラムは4つのモジュールと7つのセッションからなる。4と7はそれぞれラコタにとって聖なる数字とされる。モジュール1では、「歴史的トラウマ」とそれが育児に与えた影響に関して学ぶとともに、ラコタの価値観を示す「ウーペ・サコウィン」(7つの聖なる掟)が紹介される。モジュール1の会場は、ラコタの聖地とされるサウスダコタ・ブラック・ヒルのシルヴァン湖である。モジュール2から4にかけては、会場を居留地内の親と子どもセンターに移し、コミュニティから選ばれた2人のファシリテーターの指揮のもと、週1日2時間の活動が3週間にわたっておこなわれた。モジュール2は「ウーペ・サコウィン」を内面化させ、「ティオスパイェ」と呼ばれる家族や親族の拡張されたネットワークを強めることが目指された。モジュール3では、子どもの聖性に着目した、ラコタの子どもの発達を学ぶ。モジュール4では、ラコタ的な子育ての技術を身につける取り組みが実施された (Brave Heart 1999: 116-117)。

ワカンヘジャ・プログラムは、ソーシャルワーカーやカウンセラーらによる臨床現場での取り組みであるが、それではトライブ政府のレベルではどのような取り組みが考えられるだろうか。ブレイヴハートとデブリンは、トライブ政府が「歴史的トラウマ」を対象とした追悼の儀礼をとりおこなうことを推奨している。ここで考えられているのは、子どもをその文化に適合したやり方で育てる権利の喪失や土地の剥奪をいたむことや、返還された祖先の遺骨や聖なる遺物のための儀礼である。ひとつの例として、ラコタの戦士シッティング・ブルやウンデッドニーで虐殺された人々を記念する催しが挙げられた。「歴史的トラウマ反応」からの治癒を目指すうえでは、個人や家族の癒しだけでなく、コミュニティ規模での癒しが必要だとブレイヴハートらは指摘する (Brave Heart and DeBruyn 1998: 74-75)

先に述べたようにブレイヴハートに代表されるような「歴史的トラウマ」の先住民学的な研究は、各地で受容され、オルタナティブな医療実践と政治的な権利獲得運動の原動力として展開していった。「歴史的トラウマ」概念は、これまで先住民が現代文明に適應できない証——主流社会が誤って抱いてきた「滅びゆく民」としての先住民観を下支えする言説——として考えられがちであった健康格差が決して先住民自身の資質や能力に起因するものではなく、入植者の非人道的なふるまいによってもたらされたものであることを指摘した点において大きな意味をもっている。とりわけ、カナダでは「歴史的トラウマ」の議論によってカナダ政府が過去の暴力の非を認め、謝罪するという結果につながった点で (医療や福祉の面のみならず) 政治的にも重要な役割を果たした (Kirmayer, Gone, and Moses 2014: 300)。

3 「歴史的トラウマ」のナラティブ・アプローチ

ブレイヴハートの問題提起の後、「歴史的トラウマ」の議論は「語り」に着目したアプローチによってより精緻化されていく。アロン・R・デンハムは、アイダホ北部に住む内陸セイリッシュのサイ・ジョーンズ一家のオーラルヒストリー調査をおこなった経験から、この一家が宣教師による文化的抑圧や合衆国軍の軍事的侵攻といった甚大な「歴史的トラウマ」を経験しながらも、「歴史的トラウマ反応」の症状を示していないことの原因を考察している。デンハムは、「歴史的トラウマ」に関する研究の多くが「歴史的トラウマ」を受けた集団はすべて何らかの機能不全もしくは心理的・社会的な苦境に陥ることを前提として進められており、それ以外の可能性を考慮することはほとんどないと批判している (Denham 2008: 393)。ブレイヴハートが論じた「歴史的トラウマ」(過去の事象)と「歴史的トラウマ反応」(症状)の違いにより敏感になる必要があるとデンハムは指摘する。

デンハムによれば、サイ・ジョーンズ一家が「歴史的トラウマ」を経験しながらも「歴史的トラウマ反応」を示していないのは、この一家が強い家族の絆とその重要性を説く語りを有しているからだという。サイ・ジョーンズ一家における家族史の語りや文化行事への参加は、一家の集合的記憶を具現化するものであり、これらの実践を通じて、家族の成員は過去を経験し、祖先たちとつながることができることとされる。サイ・ジョーンズ一家では、家族内で伝統や先祖の教えを継承させる過程を、堅固で強い絆をもつことの比喩として「岩の文化」と呼んでいる (Denham 2008: 399)。この一家が家族内で流通する語りを通して、「歴史的トラウマ」の経験を飼いならすことに成功しているからこそ、「歴史的トラウマ反応」が生じていないと考えられる。デンハムは、(喪失や剥奪ではなく) 文化的生存に着目し、語りの創造や管理に焦点化したアプローチが「歴史的トラウマ」に関する臨床実践を考えるうえで重要だと提言している (Denham 2008: 409)。

デンハムの議論は、「歴史的トラウマ」が必然的に「歴史的トラウマ反応」をもたらすという単純な図式ではなく、「歴史的トラウマ」が次の世代に継承されるメカニズムのより正確な理解、とりわけそのようなメカニズムにおける語りの役割について着目することの重要性を明らかにしたと言える。語りへの着目という論点を引き継いだのは、ナタニエル・V・モハットの研究 (Mohatt, Thompson, Thai, and Tebes 2014) であった。彼らの研究では、「歴史的トラウマ」が個人的・公共的な表象を伴う現代的な物語として機能していることに着目した分析が提示された (Mohatt, Thompson, Thai, and Tebes 2014: 129)。「歴史的トラウマ」は、現在の状況を説明するために過去の事象を引き合いに出すような語りによって可視化されるものである。そもそもデンハムの研究が示したように、植民地主義的な抑圧という事象が「歴史的トラウマ反応」を引き起こしたり、引き起こさなかったりするにはあくまでもそれらがどのように家族や親族集団の語りの中で位置づけられるかに左右される部分がある。もちろん、「歴史的トラウマ」を「語り」として捉えることは、実際に起きた虐殺、抑圧、差別といった事象が存在しなかったという主張を意味しているわけではない。

モハットらによれば、現在生きている人々の健康への影響を考えるうえでは、「歴史的トラウマ」をもたらした事象自体の検討に加えて、現在その事象が人々によってどのように表象されているかという点に注目することが重要となる (Mohatt, Thompson, Thai, and Tebes 2014: 130)。

モハットらは、上記の考え方に基づいた「歴史的トラウマ」のナラティブ・モデルを提出している (図1)。このモデルでは、4つの要素を考えており、それぞれ「歴史的トラウマの語り」、「歴史的トラウマを想起させる現代の事象」、「語りの重要性」、「健康への影響」とされる。「歴史的トラウマの語り」は、文化的に構築された、過去の事象についてのある集団による語りであって、現在の状況と過去の事象を結び付ける作用がある。「歴史的トラウマを想起させる現代の事象」は、「歴史的トラウマ」が今も継続していることを示すような出来事である。公的なものとしては構造的な不平等や主流社会のヘゲモニックな言説があり、個人的なものとしては差別やマイクロアグレッション²の経験が挙げられる。「語りの重要性」は、言説や想起を通じて現代に召喚された「歴史的トラウマ」がどのように解釈されるかを指している。主流社会のヘゲモニックな言説が強く内面化された場合、それは「歴史的トラウマ」の再現前の機会となる一方で、家族や親族集団内で文化的生存の対抗言説が語られるときには、柔軟さやウェルビーイングのメッセージが伝達される (Mohatt, Thompson, Thai, and Tebes 2014: 131-132)。

モハットらのナラティブ・モデルは、初期の研究では整理された形で示されていなかった「歴史的トラウマ」と「歴史的トラウマ反応」(このモデルにおける「健康への影響」)の間にあるはずの過程を、語りが果たす役割に着目した精緻なモデルとして示した点において斬新であった。モハットらは、「歴史的トラウマ」の研究においては、過去に生じた事象としての「歴史的トラウマ」自体が人々に影響を与えるという見方を無批判に採用するのではなく、「歴史的トラウマ」を現代に召喚する「歴史的トラウマの語り」がトラウマを想起させるような現代の事象や語りの枠組みといった点に左右されながらいかに現在の人々に影響を与えるのかを考えることが肝要であると主張している (Mohatt, Thompson, Thai, and Tebes 2014: 133)。ブレイヴハートが関与したワカンヘジャ・プログラムが参加者から好評であった (Brave Heart 1999: 122-123) のは、ラコタの人々がこれまで日常生活の中で感じていた苦悩を「歴史的トラウマ」という枠組みで理解し、言語化することを可能としたうえで、ラコタの世界観や伝統的な育児規範を学び、「ティオスパイエ」と呼ばれる仲間たちのネットワークを構築することで、文化的生存の語りを共有する小集団が成立したからであると解釈することも可能かもしれない。

2 無意識におこなわれる差別的言動のこと。

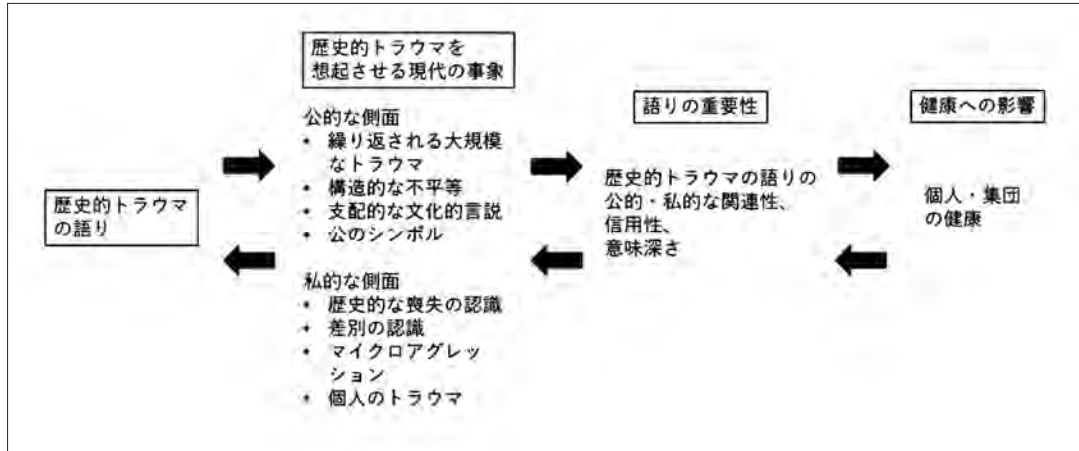


図1 歴史的トラウマが健康に与える影響のナラティブ・モデル (Mohatt et al. 2014: 132より筆者作成)

4 「歴史的トラウマ」概念に対する近年の批判

近年、「歴史的トラウマ」の研究に対して厳しい批判を加えているのは、キルマイヤーらの研究 (Kirmayer, Gone and Moses 2014) である。「歴史的トラウマ」の議論ではユダヤ人が被ったホロコーストと対比させる形で「アメリカ・インディアンのホロコースト」(Brave Heart and DeBruyn 1998) が論じられたが、実際にアメリカ先住民にもっとも大きな被害を与えたのは虐殺ではなく、感染症の流行であり、ホロコーストはあくまでも10年間ほどの一定期間に生じたことであるのに対して、先住民への抑圧は軍事的征服、同化政策と周辺化をとめない、数百年前から現在でも継続中のものであるといった大きな違いがある (Kirmayer, Gone and Moses 2014: 303-305)。初期の研究では、両者の違いを架橋するものとして、精神医学的な文脈では普遍性をもつとされる「トラウマ反応」の考え方が導入されているが、ホロコーストに関する近年の研究を集めてメタ分析をおこなった研究では、トラウマの世代間伝達はあるが、第2世代、第3世代に行くに従いその影響は弱まっていくとする見解が提出されている (van IJzendoorn, Bakermans-Kranenburg, and Sagi-Shwarz 2003)。そもそも、ホロコーストという「歴史的トラウマ」を経験したはずのユダヤ人は、社会的成功をおさめ、強い影響力を持つ者が相対的に多く、その点でも現在でも経済的な苦境に陥る場合が少ない北米先住民との違いが生じた理由について慎重に検討する必要がある (Kirmayer, Gone and Moses 2014: 308, 311)。

「歴史的トラウマ」の議論は現在人々が置かれている状況を説明する際に過去の事象に着目する一方で、現在でも引き続き人々が直面している抑圧の構造は等閑視されがちであるため、両者のバランスを取るべきであるとキルマイヤーらは提言している。彼らによれば、自殺、アルコール中毒、家庭内暴力、性的虐待がここ20年間で増加した北米先住民のコミュニティもあり、先祖たちが被っ

た「歴史的トラウマ」が間接的な影響を与えている可能性は否めないが、同時に現在進行中の構造的な抑圧から生じるものがより直接的な原因となっている可能性を考慮しなければならない。「歴史的トラウマ」を癒そうとする試みが単に過去のトラウマをいかに治療するかという問題³だけに閉じてしまった場合には、より構造的な問題が扱われずに人々を苦境に陥らせるような現在の状況が野放しになってしまう危険性をはらんでいる (Kirmayer, Gone and Moses 2014: 311)。

キルマイヤーらの批判を踏まえれば、「歴史的トラウマ」のきっかけとなった過去の過ちに対して入植者の政府が謝罪し、限定的な補償をするだけでは人々の健康格差は埋まらない可能性が高いことがわかる (cf. Mohatt, Thompson, Thai, and Tebes 2014: 133)。「歴史的トラウマ」や「未解消のままの歴史的な悲痛」の議論では、先住民の人々が経験する健康格差や苦境の原因はおもに過去の出来事によって説明されていた。しかし、キルマイヤーらによれば、健康格差の原因は先行する世代が直面したトラウマの経験 (e.g. 寄宿舎学校での虐待) にのみ求められるべきではなく、現在進行中の構造的な抑圧 (e.g. 先住民の伝統的生活圏における地下資源の採掘と貧富の差の拡大) も「トラウマ反応」の原因として同様に重要である。「歴史的トラウマ」への謝罪や補償は当然なされるべきであるが、それが「過去の清算」という視点にとどまり、現在も進行中の抑圧や差別を蚊帳の外に置いてしまう場合、健康格差をなくすという当初の目的から遠ざかってしまいかねない。

キルマイヤーらの指摘が当てはまる事例をひとつ紹介しよう。地理学者のジュリア・クリステンセン (Christensen 2017) は、カナダ・北西準州のイエローナイフとイヌーヴィックを調査地として一部の先住民の人々がホームレス化した過程について研究した。クリステンセンは、「歴史的トラウマ」(および類似する「世代間トラウマ」) 概念を援用し、寄宿舎学校での差別や虐待がサバイバーたちにアルコール依存症などの状況を引き起こした点を指摘するのみならず、資源採掘によるブーム経済に起因する住宅不足、ソーシャルワーカーによる先住民子弟の家庭からの引き離し、公共住宅での厳しい規則といった諸事情が、ホームレス状態が世代を超えて継続する背景にあると指摘した (Christensen 2017)。

彼女の調査地では、ソーシャルワーカーはアルコール依存症、薬物乱用などを理由に先住民の親から親権をはく奪することがある。子どもを奪われた先住民の親は、子どもから引き離されたこと自体で非常に大きな苦しみを味わうが、さらに構造的な抑圧は続く。公共住宅の規則上、独居者は世帯向けの住宅を利用することができないため、子どもを奪われた女性は世帯向けの住宅から追い出されてしまう。独居者向けの公共住宅は供給が大幅に不足している。私営の賃貸住宅は家賃が高

3 近年では「歴史的トラウマ」が次世代に伝達されるメカニズムとして、ブレイヴハートが論じたような虐待の連鎖だけでなく、エピジェネティックな作用 (遺伝子の発現に関係するたんぱく質のスイッチのようなメカニズム) を通して、生物学的なレベルで「歴史的トラウマ」が伝達されるとする研究もある (McGowan et al. 2009)。しかし、「歴史的トラウマ」の世代間伝達を生物学的な議論へと還元してしまうことは、その解決策を生物学の領域に委ねることにつながり、ソーシャルワーカーやトライブ政府のリーダーが求めているような構造的抑圧からの解放からは遠ざかってしまう (Kirmayer, Gone and Moses 2014: 309)。

騰しており、良い給料をもらえる仕事についていない者には手が出ない。結果として、引き離された子どもと少しでも近くにいるためには、都市にとどまるしかなく、ホームレス用のシェルターに身を寄せることとなる。このようなシェルターはアルコールや薬物が身近にある環境であり、親権を取り戻そうと思う者たちが親権はく奪の理由となった事象から距離を置くのが難しい。子どもの側は、児童福祉施設や里親のもとで育ち、親が生まれ育った文化や社会関係から切り離されて育つ。そのため、先住民コミュニティで暮らすための技能を学ぶ機会がなく、かといって都市で暮らすために必要な教育の機会が十分に与えられるわけではない。児童福祉の対象となった子どもも、ホームレスになる傾向があるという (Christensen 2017)。

クリステンセンが論じた、世代を超えたホームレス状況（および、それと深く関係するアルコール依存症や薬物乱用）の連鎖は、寄宿舎学校で受けた「歴史的トラウマ」に起因しながらも、その状況が現在も続く構造的な要因（住宅政策、福祉政策、経済体制など）によって助長・継続させられていることに特徴がある。キルマイヤーらが指摘するように、「歴史的トラウマ」が生じた原因となる過去の事象のみ焦点化して論じるのではなく、その影響が現在の構造的な抑圧と結びついて、より複雑な状況を生み出していることに目を向けることが求められている。

5 「歴史的トラウマ」を論じる際の留意点

本節では、「歴史的トラウマ」を論じる際の留意点について筆者の見解を述べる。ブレイヴハートが論じた、先住民の儀礼や精神医学的な介入による「歴史的トラウマ」の「治療」は、良い効果をもたらす可能性は十分にあるが、それら単体だけで現状の問題をすべて解決できるわけではないという視点も必要である。むしろ、これらの「治療」方法が対症療法的にのみ用いられるのであれば、政治的な問題を医療の問題にすり替えているという批判さえ招きかねない。ここでは、「歴史的トラウマ」が政治的な運動における重要概念であるのみならず、精神医学的な臨床の言葉でもあるという曖昧さに改めて目を向けるべきであろう (Kirmayer, Gone, and Moses 2014: 300)。「歴史的トラウマ」が医療の問題として扱われる時には、「治療」方法が前景化され、その方法を採用することが政治的な課題解決をももたらすかのような印象を与えてしまう。もしこの点を逆手にとった植民者の政府が「歴史的トラウマ」を純粋な医療の問題として扱った場合、現在も続く構造的な抑圧や差別を減らす取り組みや先住民の主権に対する敬意を払った政策のかわりに、医療資源化された先住民の儀礼や精神医学的な介入への資金援助をすることで、「歴史的トラウマ」が解決し、完全な形での和解がもたらされたことにされてしまいかねない点が懸念される。

また、先行研究の問題意識を引き継いで、私が指摘したいのは「歴史的トラウマ（反応）」言説を誤って分析に利用した場合、先住民の生活世界を病理的なものとしてみるおそれが想定されることだ。例えば、ブレイヴハートによれば、「歴史的トラウマ」のせいでラコタの人々は子どもを聖なる

ものとして大事に扱う習慣を失い、虐待やネグレクトをする親が増えたとされる。ラコタの場合はおそらくブレイヴハートの見解が正しいのであろうが、外来の調査者が先住民コミュニティ内の社会関係を研究する際にもともとその社会で一般的におこなわれていた慣習を誤って伝統的な規範が崩壊した姿と捉えてしまう場合がある。

カナダのヘヤー社会を研究した原ひろ子は、マードックが人類のすべての社会に普遍的に存在すると論じた核家族をヘヤーの生活に見出すことができなかった。原が調査した1960年代には、ヘヤーの中にはヨーロッパ系カナダ人の影響で酒に溺れる者も出てきており、そのせいで「もとは一夫一婦でキッチンとしていた性生活も乱れ、子どもの世話もないがしろになってきた」（原 1989: 259）、つまり今見ているのはヘヤーの家族制度が崩壊している過程であるという考えに調査の初期には傾きかけたという。

しかし、ヘヤーは村落の中でも滞在する家を頻繁に変える流動的なテント仲間のメンバー構成をしていること、生みの親が子どもを養育しなければいけないという規範はないこと、かつ、養子を気軽に育てることなどを知ってからは、「家族崩壊過程説」を採用するのはやめたという（原 1989: 259）。むしろ、恒常的な核家族を持たないことによって、「核家族」の成員として権利や「家族」集団の論理から解放されて、個々の生存に最大限の関心を注ぐことができるようになるため、厳しい自然環境での遊動的な生活により適応的になるのだと原は考えるようになった（原 1989: 260）。原が論じたように、ヘヤーを含む北方アサバスカン社会は個々の自律性を重要視する社会であり、それは子どもの養育にも当てはまる。原が撮影した一人遊びする子どもの写真（原 1989: 349）は、彼らが幼少の頃から一人で行動することを厭わず、試行錯誤の中で生活に必要な技能を身に付けていく過程の初期状態を表すものと考えられるが、西洋近代的な育児観からみればネグレクトの現場として映ってしまう可能性もある。

私も内陸アラスカの北方アサバスカン系集団の村で現地調査をした際に原と似たような感想を抱いたことがある。ある40代のシングルマザー Aの家に滞在していた時、その女性の家では娘B、息子C・D、孫E（Bの息子）の5人がおもに住んでいた。しかし、CとDが深夜になっても帰宅しないことが頻繁にあった。そのような時には彼らは近くにあるAの父母宅に寝泊まりしており、Aに事前に連絡することはなかった。また、私が滞在していた夏休みの時期にはAをはじめ、E以外の者が起きてくるのは午前中もほぼ終わろうかとする時間帯であり、お腹を空かせたEにせがまれて、居候である私が彼のためにオートミールと粉末オレンジジュースの朝ごはんを作っていた。私が生まれ育った現代日本（和人）の価値観からすれば、家族崩壊の状況のようにみえるが、個々の自律性を尊重する社会という点を踏まえれば、未成年が親に無断で外泊し（と言っても近所ではあるが）、幼児が起床から数時間、親の目を離れて自由に家の中を歩き回っているのも簡単に「家族崩壊」とみなすことができない。ここで書いたのは「歴史的トラウマ（反応）」に対する批判ではなく、あくまでも分析に利用する際の留意点である。この概念を分析に利用する際に、一歩間違えば観察者が内面化し

ている規範と異なる在来の習慣を「入植の影響による伝統文化の崩壊過程」として取り違える陥穽におちいりかねないことは指摘しておきたい。

ここまで「歴史的トラウマ」に関する留意点を述べてきたが、ブレイヴハートの提起した議論や臨床実践が画期的なものであり、今後もこの分野の研究が重要であることは言を俟たない一方で、近年の研究が指摘しているように、この概念に含意されるパースペクティヴから漏れてしまいがちな側面を丁寧に拾い上げていく必要があるし、この概念が論じられるやり方によっては注意が必要な場合があるという認識も重要である

6 おわりに

本稿では 北米先住民研究における「歴史的トラウマ」に関する議論の展開をレビューしてきた。「歴史的トラウマ」は、臨床精神医学やソーシャルワークと先住民学の交差領域として、北米先住民社会とアメリカ合衆国の主流社会の間にある健康格差や北米先住民の政治的な権利獲得を考える上でのキータームとして発展してきた。この概念を北米先住民研究の文脈に導入したブレイヴハートがラコタ出身のソーシャルワーカーであったことからわかるように、彼女の実践はソーシャルワークを脱植民地化するための試みとして理解することができる。現在では、彼女の問題提起はナラティヴ・アプローチによってより精緻化されるとともに、「歴史的トラウマ」概念をより徹底した脱植民地化に向かわせようとするキルマイヤーらによる近年の批判も登場している。

従来のソーシャルワークの実践が西洋由来のモデルに基づいており、非西洋の文化に関する理解を欠くため、先住民などの非西洋の文脈において、社会的に不利な立場に置かれた人々の救済という基本理念を達成できていないことが多いという指摘がある (Gray, Coates and Yellow Bird 2008; Gray, Coates, Yellow Bird and Hetherington 2013)。そもそも問題の根底には、北米先住民の人々がコミュニティ内外でおこなってきたケアの実践を捨象し、ソーシャルワークはジェーン・アダムズ⁴が創始したというヨーロッパ系アメリカ人の見解が疑問に付されることなく、分野内で流通していることにあると考えられる (Yellow Bird and Gray 2008: 62-63)。さらには、アメリカ合衆国の場合、北米先住民の子弟を親から引き離し、非先住民の家庭の養子とする介入政策の実働部隊をソーシャルワーカーが担ったという歴史もある (Weaver 2008: 73)。

「歴史的トラウマ」概念は、このようなソーシャルワークを取り巻く状況を変革させるための試みでも引き続き議論されている (Mokuau and Mataira 2013)。現代文明への不適応者として先住民を描くのではなく、植民地主義的な抑圧のサバイバーとして先住民を捉えなおすことで、先住民の文化と尊厳の復権が先住民をとりまく苦境の解決策になるかもしれないという考えが生まれた。この

4 アメリカの社会事業家。イギリスのセツルメント運動に影響を受けて、シカゴの貧窮者のための慈善活動をおこなった。

発想の転換を明示的に示した点において、プレイヴハートらの研究の意義は大きい。

しかし、前述したように「歴史的トラウマ」をめぐる先住民研究にはさらに説明のためのモデルとして改良すべき部分があるし、他地域の文脈に当てはめて理解する際には留意が必要な点も少なくない。本稿の第3章では「語り」の側面からこのモデルを整理した先行研究を扱い、第4章では「歴史的トラウマ」のみならず、現在も続く構造的抑圧の状況の影響を考えるべきとする批判を取り上げた。第5章では、「歴史的トラウマ」をより有効な形で用いるための留意点として、この概念を通じた過度な医療化への懸念と調査者が生まれ育った規範と異なる現地の規範が誤解され、伝統的な規範の衰退を示すさまとして分析されかねない点を述べた。これらの批判や留意点の指摘は、「歴史的トラウマ」概念がもつ可能性を減じるものではない。今後、「歴史的トラウマ」をめぐるアイヌ・先住民研究が始まり、他地域における先行研究との比較も踏まえながら、新しい実践や提言に結びついていくために、本稿が何かの役に立つのであれば幸甚である。

参考文献

小野修 (1979) 「ネブラスカのインディアン：その征圧の過去と現在」『主流』 40: 80-104.

原ひろ子 (1989) 『ヘヤー・インディアンとその世界』 東京：平凡社.

Brave Heart, Maria Yellow Horse (1999) *Oyate Ptayela: Rebuilding the Lakota Nation through Addressing Historical Trauma among Lakota Parents. Journal of Human Behavior in the Social Environment* 2(1-2): 109-126.

Brave Heart, Maria Yellow Horse and Lemyra M. DeBruyn (1998) The American Indian Holocaust: Healing Historical Unresolved Grief. *American Indian and Alaska Native Mental Health Research* 8(2): 60-82.

Christensen, Julia (2017) *No Home in a Homeland: Indigenous Peoples and Homelessness in the Canadian North*. Vancouver: UBC Press.

Denham, Aaron R. (2008) Rethinking Historical Trauma: Narratives of Resilience. *Transcultural Psychiatry* 45(3): 391-414.

Gray, Mel, John Coates, and Michael Yellow Bird (2008) *Indigenous Social Work around the World; Toward Culturally Relevant Education and Practice*. London: Routledge.

Gray, Mel, John Coates, Michael Yellow Bird and Tiani Hetherington (2013) *Decolonizing Social Work*. Routledge.

Kirmayer, Laurence J., Joseph P. Gone, and Joshua Moses (2014) Rethinking Historical Trauma. *Transcultural Psychiatry* 51(3): 299-319.

Marinus H. van Ijzendoorn, Marian J. Bakermans-Kranenburg, and Abraham Sagi-Schwartz (2003). Are children of Holocaust survivors less well-adapted? A meta-analytic investigation of secondary

- traumatization. *Journal of Traumatic Stress* 16(5): 459–469.
- McGowan, Patrick O., Aya Sasaki, Ana C. D'Alessio, Sergiy Dymov, Benoit Labonte, Monshe Szyf, Gustavo Turecki and Michael J. Meaney (2009). Epigenetic regulation of the glucocorticoid receptor in human brain associates with childhood abuse. *Nature Neuroscience* 12(3): 342–348.
- Mohatt, Nathaniel Vincent, Azure B. Thompson, Nghi D. Thai, and Jacob Kraemer Tebes (2014) Historical trauma as public parrative: A conceptual review of how history impacts present-day health. *Social Science and Medicine* 106: 128-136.
- Mokuau, Noreen and Peter J. Mataira (2013) From Trauma to Triumph: Perspectives for Native Hawaiian and Māori Peoples. In: Gray, Mel, John Coates, Michael Yellow Bird and Tiani Hetherington (eds.) *Decolonizing Social Work*, pp. 145-164, London: Routledge
- Yellow Bird, Michael and Mel Gray (2008) Indigenous People and the Language of Social Work. In: Gray, Mel, John Coates, and Michael Yellow Bird (eds.) *Indigenous Social Work around the World; Toward Culturally Relevant Education and Practice*, pp. 59-69, London: Routledge.
- Weaver, Hilary N. (2008) Indigenous Social Work in the United States: Reflections on Indian Tacos, Trojan Horses and Canoes Filled with Indigenous Revolutionaries. In Gray, Mel, John Coates, and Michael Yellow Bird (eds.) *Indigenous Social Work around the World; Toward Culturally Relevant Education and Practice*, pp. 71-81, London: Routledge.
- Wirihana, Rebecca and Cheryl Smith (2014) Historical Trauma, Healing and Well-being in Māori Communities. *MAI Journal* 3(3): 197-210.

Development of “Historical Trauma” Concept in Indigenous Studies in North America

Shiaki Kondo (Kobe University)

ABSTRACT

In this paper, I review prior studies on historical trauma among Indigenous societies in North America. Historical trauma is a very important concept in Indigenous studies in that it suggests health disparity is caused by settlers’ deplorable behaviors. However, there are some criticism against this concept. First, studies on historical trauma tend to assume that all groups under such trauma inevitably show historical trauma response, including depression, alcoholism and drug abuse. Second, discussions on historical trauma focus on the past traumatic events as an ultimate cause of health disparities, they tend to disregard the effects of on-going structural inequalities. If we are to apply this concept to Ainu studies, we should be aware of warnings raised by the prior studies.

Keywords: Indigenous socialwork; narrative; medicalization; Northern Athabascans.